

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実 施 報 告 書

HT28137 プログラム名 病気別の食事を考えた自分カルテ作り'16：人形のおなかを見てさわってきいてみよう



開 催 日：平成28年8月4日(木)

実 施 機 関： 関東学院大学

(実施場所) (金沢八景キャンパス)

実施代表者： 永田 真弓

(所属・職名) (看護学部・教授)

受 講 生： 小学校5・6年生 22人

関 連 URL： <http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/index.php/ja/home/news/news/1462-2016-08-01-1.html>

【実施内容】

1 プログラムの目的

本プログラムは、科研費による研究を通じて作成した小児がん治療中の子ども(小学生)の食生活を支援するプログラムをアレンジし、受講者が食事と栄養、健康な子どもでも風邪を引いた時に生じる発熱や下痢、口内炎などの症状出現時の食事、消化管に関する基本的な知識を学び、生じやすい症状について自分の体の状態に合った食事対策について考えることを目的とした。

受講者である小学生が、人の体や食事について、講義や体験を通じて楽しみながら知ることで、子どもでも「セルフケア/セルフマネジメント:自分の体や生活を、いい状態にしようとする事」ができることを学ぶ機会とした。

2 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために留意した点

- ・科研費により作成した小児がん治療中の食生活支援プログラムの電子版リーフレットは、小学生を対象としていたため、講義「食事と栄養、食事と症状について」は、その電子版リーフレットを一部修正のうえで、可能な限り活用した。
- ・受講者が小学生であることを念頭において、集中できる時間や講義と実習の組み合わせを考慮し、1つの講義時間や体験・実習の時間は30分以内とし、講義した内容をすぐに体験・実習できる構成にした。
- ・体験・実習にシミュレーター人形を用い、テーマにあるように「触って、見て、聴いてみよう」の感覚を通した人体の解剖や機能に関する学習機会を多くした。
- ・受講生は5～6名のグループ編成とし、各グループに教員と学生を各1名配置することで、疑問や質問等に対応できる体制を整えた。
- ・基本的な学習を終えたあとの復習には、学生による身体を動かしながら答える〇×クイズを実施し、学習方法にメリハリをつけた。

3 受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを工夫した点

- ・夏休み期間中の活動や宿題等に活用できるように配慮し、開催時期を8月初旬の平日にしたところ、69名の応募があり、受講者からは自由研究に活かしたいという声が聞かれた。
- ・受付から開会式までの時間は、隣にある在宅・老年・精神実習室を開放し、展示・掲示物やモデル人形等の

見学ができるよう、設定した。受講者・保護者ともに、関心を示し、興味深く見学をしていた(30～50分程度)ことから、近年重要視されている看護学分野への興味・関心に繋ぐことができた。

・少人数によるグループでの体験・実習を行うために、実習室内でシミュレーター人形と座席との移動を繰り返す形式となったが、キャラクターによるグループ分けをしたことで、スムーズに移動が行われ、1グループ毎のシミュレーター人形を用いた体験・実習の時間が、十分に確保できた。

・腸音を聴診する体験・実習では、シミュレーター人形を使用し教員とダブルステートにより腸音を確認した後、一人用のステートを渡して、自分の腸音を確認するよう促したところ、受講生は自らの腹部も聴診して、腸音を確認することができていた。また、シミュレーター人形の他の身体部分やコンピューターの作動に関する興味・関心を持つ姿もみられた。

・シミュレーター人形を使用しない時には、1人1冊の人体図鑑仕掛け絵本を配布し見てもらうことで、これまでの学習内容の復習のみならず、本プログラムで学習した消化管以外の人体に関する興味・関心をもつことにも繋がっていた。

・〇×クイズでは、難易度の異なる問題を作成するとともに、答えの理由を尋ねる、あるいは質問を受ける機会を持つことで受講者の好奇心や関心が継続できるようにした。

・自分カルテの作成では、受講生に起こりやすい症状を連想してもらうことや学習してきた資料を活用することにより、症状出現時の食事対策が具体的に考えられていた。

・昼食とクッキータイムには、飲食が済んだ時点でアイスブレイクを実施したところ、緊張が和らぎ、グループ内の会話や活動がスムーズに行われるようになり、その後のグループ内の受講者同士の交流が活発となった。

・自分カルテの発表は、各グループ1名をランダムに指名して行った。4名全員が講義内容を踏まえ自分の症状に合わせた食事について堂々と発表をし、それぞれの学びが共有できた。

4 当日のスケジュール

10:00～10:30 受付(金沢八景キャンパス E6号館4階(第4実習室))集合

10:30～11:00 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)

11:00～11:30 講義「食事と栄養、食事と症状について(講師:永田真弓)」

11:30～12:00 体験・実習「仕掛け絵本とモデル人形を使って、消化管を観察してみよう」

12:00～13:00 昼食・休憩

13:00～13:30 講義「腸音とそのきき方について(講師:飯尾美沙)」

13:30～14:00 体験・実習「聴診器を使って、シミュレーション人形のおなかの音をきいてみよう」

14:00～14:10 体験・実習「お腹が痛い時はどんなものを食べたらいいかな? ～症状別食事対策クイズ～」

14:10～14:20 休憩

14:20～14:40 クッキータイム&質疑応答

14:40～15:00 体験・実習「症状別食事対策:自分カルテを作ろう」

15:00～15:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

15:30 終了・解散

5 実施の様子



解剖モデル人形の観察



仕掛け絵本で消化管の観察



症状別食事対策クイズ

6 事務局との協力体制

- ・総合研究推進機構運営課が委託費の管理、および日本学術振興会への連絡調整や提出書類の確認・修正等を行った。
- ・総合研究推進機構と学部庶務課、広報室が連携しながら実施に伴う手続を行った。

7 広報活動

- ・神奈川県が主催するかながわサイエンスサマープログラムに登録し、県内の小学校に広報誌が配布され広報が広くいきわたるようにした。
- ・大学ホームページに案内記事を掲載するとともに、プレスリリースを行った。
- ・キャンパス近隣の駅に募集案内ポスターを掲載した。
- ・付属小学校にポスターおよびチラシを配布した。
- ・6月に開催された大学イベントの際にチラシを配布し、近隣に広報した。
- ・株式会社JSコーポレーションの「体験イベントin大学」サイト、東京新聞および神奈川新聞を通して広報を行った。

8 安全配慮

- ・受講者および実施協力者(学生)については短期のレクリエーション保険に加入した(実施者及び実施担当事務職員については加入している労災保険が適用される)。
- ・聴診器の使用時は、消毒した清潔な状態で使用できるようにアルコール綿を準備し、一回使う毎に消毒した。
- ・当プログラムには、危険を伴う実習等は含まれていないが、プログラム中は受講者5~6名当たり実施者1名および実施協力者1名ずつ配置し、受講生の様子に充分目を配れる体制を整えた。
- ・受講者の体調不良に備え、大学の医務室との協力体制を整えた。
- ・室内のプログラムだが、熱中症予防のため、飲料水を準備した。
- ・食物アレルギーの受講者には、内容を詳細に確認するとともに、摂取可能なおやつ・食事を出す等により対応するとともに、食品を提供する際には本人確認を確実にを行った。

9 今後の発展性、課題

- ・アイスブレイクにより、午後の時間帯には、グループ内の交流が活発となる。そこで、この受講者同士の交流を活用し、基本的には個人ワークで実施していた、「自分カルテづくり」をグループワークに変更することで、受講生に起こりやすい症状やその時の食事は、個々に異なること等、症状出現時の食事対策について、より深く学習することができると思う。

【実施分担者】

看護学部 助教 飯尾 美沙

看護学部 助手 清水 裕子

看護学部 助手 橋浦 里実

【実施協力者】 4 名

【事務担当者】

総合研究推進機構運営課 係長 森 賢司